

## 近代日本の産業発展と労働衛生の進展 : 1910年代から1930年代の石炭産業を中心に

菊池, 美幸

<https://hdl.handle.net/2324/6787395>

---

出版情報 : Kyushu University, 2022, 博士 (経済学), 課程博士  
バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏名	菊池 美幸			
論文名	近代日本の産業発展と労働衛生の進展 —1910年代から1930年代の石炭産業を中心に—			
論文調査委員	主査	九州大学	准教授	北澤 満
	副査	九州大学	准教授	堀井 伸浩
	副査	九州大学	准教授	鷺崎俊太郎

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、戦前期日本の石炭産業を事例として、労働者の健康問題に関して、企業および行政（監督省庁）がどのように対応したのかを明らかにするとともに、近代日本の労働衛生の形成過程において炭鉱企業が果たした役割について、経済史および経営史の視点から意義づけを行っている。

具体的には、日本最大の炭鉱企業であった三井鉱山株式会社傘下の諸炭鉱を分析対象とし、職業性疾病（職業病）としても審議された「ワイル氏病」・「十二指腸虫病」・「鉱夫眼球震盪症」に関する対応を考察している。ワイル氏病は、1910年代においては致命率が高い病気であったが、同病への三井鉱山の対応について、①医療面、②制度面、③技術面の3点から検討し、行政による職業性疾病指定以前から、積極的かつ有効な対策を行っていたことを明らかにした。とりわけ①について、当時、世界最先端のワイル氏病研究を行っていた九州帝国大学医科大学（医学部）との協力関係が重要な意味を持ったことを指摘する。十二指腸虫病は、戦前期日本に広く蔓延した寄生虫感染症であったが、炭鉱では準職業病としても扱われていた。三井鉱山では、①坑内便所の改善、②住宅改善、③鉱夫に対する衛生教育の徹底、④健康保険組合を通じた定期的な集団駆虫が実施され、鉱夫の十二指腸虫卵保有率を大幅に引き下げた。三井鉱山の対策は、当時の政府が、寄生虫感染症対策の方法として最も理想的であることを認識しながらも、膨大な費用と手間を投じる必要があったがために放棄した手法であり、それを企業内で実現したことに大きな意義があったとする。鉱夫眼球震盪症は、暗黒下の長時間労働に起因する眼疾患であり、その存在は、業務上負傷（＝重大事故ではなく、日常的に繰り返し生じる業務災害）の多さとともに、炭鉱における「坑内の暗さ」が労働衛生上の重要な課題となっていることを示していた。三井鉱山では、他炭鉱に先駆けてキャップランプを導入したことで坑内の暗さが緩和され、業務上負傷の減少、および鉱夫眼球震盪症の予防・撲滅が可能となった、と主張する。総じて、大炭鉱企業である三井鉱山が、企業経営を存続させていくための一方策として、社内における労働衛生対策を着実に根付かせていったことが強調されている。

本論文全体として、一次資料に基づく堅実な検証を通じて、労働衛生問題を、経済史・経営史研究分野において位置づけることに成功しており、その学界への貢献は高く評価できる。以上より、本論文調査委員会は、菊池美幸氏から提出された論文「近代日本の産業発展と労働衛生の進展—1910年代から1930年代の石炭産業を中心に—」を博士（経済学）の学位を授与するに値するものと認める。